

# 目 次

|           |    |
|-----------|----|
| まえがき      | iv |
| 本書を読まれる前に | vi |

## 第 I 部 母語獲得 (鈴木孝明)

|                   |    |
|-------------------|----|
| 第 1 章 母語獲得とは      | 3  |
| 第 2 章 言語音の知覚と語の獲得 | 11 |
| 第 3 章 文の獲得        | 37 |
| 第 4 章 インプットの役割    | 63 |
| 第 5 章 言語獲得理論      | 83 |

## 第 II 部 第二言語習得 (白畑知彦)

|                      |     |
|----------------------|-----|
| 第 1 章 第二言語習得とは       | 113 |
| 第 2 章 中間言語           | 123 |
| 第 3 章 第二言語習得のメカニズム   | 153 |
| 第 4 章 学習者要因          | 175 |
| 第 5 章 教室における第二言語習得研究 | 203 |

|      |     |
|------|-----|
| 参考文献 | 227 |
| 索引   | 243 |

## まえがき

母語獲得と第二言語習得の両方を一冊の本で扱い、しかも日本語で書かれたテキストはないのだろうか？「言語習得」について学び始めた学生も、講義を担当する教員も、このような書物を一度は探した経験があるのではないだろうか。著者達も例外ではなかった。ところが、いざ探してみると、それが「ない」のである。もちろん、言語学や応用言語学の分野を包括的に扱った入門書では、母語獲得と第二言語習得の章が存在するものが多い。しかし、これらは、広くて浅い概論的な説明で終わっているものであったり、特定の専門的側面のみを扱った難解なものだったり、著者達の希望を満たすものではなかった。「もう少し深い内容を扱った言語習得の入門書が欲しい。でもなさそうだから、自分たちで作ってしまおうか」ということになり、執筆を始めたのが本書である。

さて、著者達のニーズをもう少し明確に述べれば、以下の3点に集約できる。第一に、「わかりやすい本」ということである。その目安として、大学生などがひとりで読んで、8割方は理解できるものを目指そうとした。第二に、「言語習得研究の面白さが伝わる本」ということである。面白さをわかってもらうためには、単に「こんなことがわかっています」と提示するのではなく、「このような予測(仮説)をもとに、このような方法で調査したら、このような結果がでてきました。では、なぜそうなったんだろうか？」という具体的な研究の話をするのが一番だと考えた。したがって、本書では、基本事項をおさえた上で、専門的な研究事例の紹介にも多くの紙面を割くことになった。そして、第三のニーズは、大学での授業を想定した場合、「年間の授業を通して(または、春と秋の Semester で)最初から最後まで読み通せる一冊」ということである。よって、第Ⅰ部の母語獲得と第Ⅱ部の第二言語習得では、それぞれ半期の授業に割り当てられるような分量にした。

本書は、大学の学部生を主な読者対象に想定している。学生としては、文学部、教育学部、外国語学部などの授業で専門教育の1つとして言語習得論を学ぶ場合もあるだろうし、その他の学部にも所属する学生が一般教育の1つ

として学ぶ場合もあるだろう。このような際の入門書としてご利用いただきたいと考えている。また、大学院生や研究者の方にとっては、レファレンス・ブックとしても使えるように、最新の知見も盛り込みながら、文献をできるだけ充実させた。本書を出発点に、参考文献に記載されている原著書に当たり、研究の幅をさらに広げてくださればと思う。

本書では、母語獲得と第二言語習得の両分野における話題を幅広く扱ったつもりである。しかしながら、取り上げた内容が、これらの分野のすべてを網羅できているわけではない。何をどこまで扱うのかという選択に関して、著者達の好みや専門性が反映されている。しかし、両名は共に母語獲得と第二言語習得の両分野の研究者であり、本書の構成を練り上げる上で、また、修正作業を行う際に、両者の内容を公平な目で見られたことは非常に有益であった。

最後に、本書を完成するに当たって、多くの方々からご助力を賜ったことに感謝申し上げたい。草稿に目を通してコメントをくださった稲垣俊史さん、小林哲生さん、川越いつえさん、そして資料を提供下さった伊藤友彦さんに御礼申し上げます。また、授業で本書の一部を使用した際にご協力くださった大阪府立大学の大学院生の皆さんにも感謝申し上げます。そして、本書の構想段階から最終稿の完成に至るまで、丁寧に、そして辛抱強くお付き合いくださった、くろしお出版の池上達昭さんに心から感謝申し上げます。

2011年12月吉日  
鈴木孝明・白畑知彦

# 第 1 章

## 母語獲得とは

幼い子どもにできないことはたくさんある。車を運転することも、ひとりでバスや電車のチケットを買うこともできない。買い物をして複雑な計算はできないし、靴下を履いたり、食事をしたりするときでさえも手伝ってあげる必要がある。そのような子どもがなぜ、複雑で抽象的な言語を操ることができるのだろうか。外国語を学ぶことがいかに大変な作業かということは、多くの人を経験しているだろう。単語の発音や意味を覚え、何度も間違えながら文法事項をマスターしていくのは苦痛でさえある。途中で挫折することもある。しかし、子どもが母語を獲得するときに、挫折することはない。障害がある場合を除けば、どの子どもも同じように母語を獲得するのである。では、いったい何がこのようなことを可能にしているのだろうか。母語獲得研究とは、子どもが母語を獲得する仕組みを探る分野である。

本章では、母語獲得研究は、何を対象として、どのような方法で調査を行うのか簡単に紹介するが、その前に「母語」と「獲得」という2つの用語について明確にしておきたい。「母語(native language)」とは、子どもが生まれ育つ環境で自然に身につける言語であり、通常はこれが第一言語(first language)(L1と表記される)となる。第一言語といった場合は「最初に」獲得する言語、または、複数の言語を獲得しても「優勢な」言語という意味で使用されることもあるが、本書では、これらの区別は行わずに、母語という用語で統一する。また、「獲得」という用語は acquisition の訳語で、ここでは子どもが母語を身につけていくことを意味する。第Ⅱ部で扱う第二言語習得では、同じ acquisition の訳語として「習得」という用語が使用されることが多く、本書でもこの慣例に従うが、「獲得」も「習得」も同じ意味だと思って差し支えない。

## 第2章

# 言語音の知覚と語の獲得

私たちは、わからない語を耳にしたとき、他の人に聞いたり、辞書を引いたりして、その語の意味や用法を知ることができる。外国語学習の場合は、まず語という単位で意味を捉えてから、文の組み立て方を学ぶ場合が一般的である。よって、文をつくるときに、どこまでが一語なのかを気にすることはまずない。しかし、生まれたばかりの子どもは大きく事情が異なる。乳児は辞書を持っていないし、わからない語の意味を親に聞くこともできない。まだしゃべることもできなければ、質問の仕方さえもわからないのである。さらに、文字を知らない乳児は、親が話すことばの中で、どこからどこまでが最初の一語で、どこからが次の語なのかもわからないはずである。要するに、私たちが口のきけない状態で全く知らない外国語の世界に辞書も先生もなしで放り出されたのと同じような状況である。

そのような中で、子どもは一体どのようにして母語獲得の第一歩を踏み出すのか、本章では、まず音声を中心とした初期の言語発達を概観する。子どもは、自分を取り囲んでいる無数の音の中から、母語に必要な音を選んでそれらを学習しなければならない。このためには、どのような能力が必要とされるのだろうか。また、母語に使用される音と使用されない音の識別は、幼い子どもにできるのだろうか。次に本章では、語の獲得を見ていく。母語の語を獲得するためには、音の連続体から、語を特定して、それらに意味を与えていかななくてはならない。この過程で誤り (error) が起こることもあるが、子どもたちはみな、最終的には大人と同じように、母語の語に関する知識を身につける。そこにはどのような仕組みが働いているのだろうか。

## 第3章

# 文の獲得

人に何かを伝えたい場合、単純に語を並べるだけではうまくいかないことが多い。たとえば、「机」＋「鉛筆」＋「落とす」と並べると、「机に鉛筆を落とす」という意味かもしれないし、「机から鉛筆を落とす」という意味かもしれない。さらに、「机を鉛筆に落とす」という可能性がないわけではない。意味を正確に伝えるためには、文に使用する語の形を整えながら、それらを特定の順序で並べる必要がある。この時の規則を文法、または統語論(syntax)とよぶ。

子どもが話し始めるのは生後1歳前後である。この頃の子どもは、一語での発話しかできないので、この時期を一語文期(one-word stage)とよぶ。しかし、近年の研究では、この時期の子どもでさえも二語以上から成る文の理解ができることが明らかにされている<sup>1</sup>。子どもは、やがて語と語を組み合わせて二語文を使う二語文期(two-word stage)に入り、その後さらに語をつなげて文を作る多語文期(multi-word stage)を迎える。語彙は限られているが、この頃になると、子どもはかなり複雑な文を使ったり理解したりするようになる。たとえば2歳4ヶ月の子どもがテレビ番組について母親に言った(1)を見よう<sup>2</sup>。

(1) ぞうさんのが はじまるかなあ。

この文では「ぞうさん」に続く「の」が、格助詞としての役割と、テレビ番

<sup>1</sup> Hirsh-Pasek & Golinkoff(1996)

<sup>2</sup> 筆者の観察による

## 第4章

# インプットの役割

「子どもは言語をどのようにして身につけると思うか」と質問すると、多くの人が「親が話すのを真似して覚えるのではないか」と答える。模倣(imitation)という方法である。たしかに、子どもは親のすることや言うことを模倣する。また、子どもに対して語りかけること、すなわち、インプット(input)を与えることは、母語獲得にとって必要不可欠である。しかし、子どもはインプットをそのままの形で発話してはいない。もし、子どもの発話が模倣のみによるものならば、子どもが言うことは、すべて過去に誰かがその子どもに対して言ったことだ、ということになってしまう。また、子どもの発話には親の語りかけにはない誤りが起こる。これは、子どもが模倣のみによって、言語を獲得しているわけではないことを示している。では、子どもは母語獲得のために、インプットをどのように利用するのだろうか。また、誤りをした場合は、どのようにしてそれを修正し、正しい文法を身につけるのだろうか。本章では、母語獲得におけるインプットについて見ていく。

### 模倣や類推による学習

今から半世紀前の心理学では、行動を観察することによって心の解明を進めようとする行動主義(behaviorism)とよばれるアプローチが盛んであった。この考え方を言語に当てはめたB.F. スキナーは、言語も他の習慣形成と同じように刺激と反応の結合が強化されることによって説明されると主張した<sup>1</sup>。たとえば、親が子どもに話しかける。これが刺激である。これに対して、子どもは自分がおかれた状況から判断して何らかの反応を示す。たとえば、親

<sup>1</sup> Skinner(1957)

## 第5章

# 言語獲得理論

子どもたちは皆、母語を獲得する。子どもたちを取り巻く環境は様々であるが、どのような環境で育っても、母語の獲得に失敗することなどありえない。この事実は、他のスキルの獲得と比べるととても不思議なことである。たとえば、サッカーで、ボールを正確に遠くまで蹴るスキルは、通常練習を積み重ねて獲得していくが、同じ練習をしても、誰もが同じレベルになるわけではない。ところが言語の場合は、特別な訓練もなく、だれでも同じように母語を操れるようになるのである。なぜ、このようなことが可能なのだろうか。言語獲得理論(母語獲得理論とよんでもよい)とは、その仕組みを説明しようとするものである。

図1は母語獲得の過程を簡単に図式化したものである。中央が子どもの心／脳で、ここで母語の獲得が行われる。前章で扱ったインプットは、子どもが親や周りの母語話者から受け取る情報のことを指すが、もう少し広い意味合いで経験といってもよい。アウトプットとは、個別文法、すなわち日本語の文法や英語の文法といった、通常は子どもがおかれている環境で使用されている言語の規則を指す。

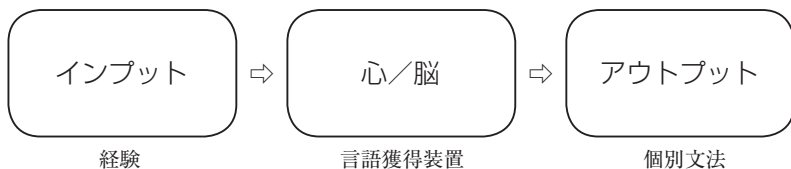


図1 母語獲得モデル



# 第 1 章

## 第二言語習得とは

私達は母語(native language)だけでなく別の言語も学ぶことができる。第 2 番目に学習する言語を第二言語(second language, L2)とよぶ。第 II 部の目的は、第二言語を習得するとはどのようなことなのか、そして、この第二言語習得(second language acquisition, SLA)を解明するために、これまでにどのような研究が行われてきたのか概説することである。第二言語の習得を研究する学問を第二言語習得研究(SLA research)とよぶ。なお、「第二言語」という用語は、ある言語がその人にとって何番目の学習言語でも、2 番目以降に学ぶ言語について使う場合が多い。

第二言語と外国語という言葉をその学習する環境によって区別する場合がある。学習する言語が日常生活で使用されている場合、その言語を「第二言語」とよび、この学習環境を「第二言語環境(second language environment)」あるいは「自然な習得環境(naturalistic L2 learning environment, informal L2 learning environment)」とよぶ。たとえば、アメリカで日本人が英語を習得する場合はこれにあたる。一方、当該第二言語が話されていない国や地域において、学校教育などの一環として学習する場合は「外国語」とよび、その学習環境を「外国語環境(foreign language environment, formal L2 learning environment)」とよぶ。たとえば、日本人が日本の教室で英語を学習する場合はこれにあたる。

ただし、本書では「第二言語習得」と「外国語学習」の両者を特に区別して論じなければならない場合を除き、母語以外の言語の学習の総称として、「第二言語(習得)」という用語を使用することにした。「第二言語習得」と「外国語学習」の関係は図 1 のとおりである。

## 第2章

# 中間言語

第1章で述べたように、第二言語学習者と母語獲得をする幼児の相違点の1つに、「言語を1つ獲得しているか否か」がある。本章ではこの相違点がどのように第二言語習得に影響を与えるのか考えることから始めたい。

母語に比べるとなぜ第二言語は習得しにくいのか。一般人がそう問われれば、日本語を母語とし英語を学習する場合、次のような答えが返ってくるかもしれない。「それは、日本語と英語の構造が違うから。特に日本語にはない英語の構造や特性を新たに習得するのは難しいため」であると。たしかに、日本語の規則と類似する英語の規則には、その日本語の特性をそのまま当てはめればよいだけであって、さほど労力は必要なさそうである。一方で、まったく違う構造を新しく学習したりするのは骨の折れる仕事になりそうだ。

### 第二言語習得を妨げる要因

母語の特性が第二言語習得の妨げとなったり、学習を遅延させたりする時、それは母語からの負の転移(negative transfer)が働いているとか、母語からの干渉(interference)が起こっていると言う。実際に、これまでの多くの研究から、母語からの負の転移は学習者に悪影響を及ぼす1つの重要な要因であることがわかっている<sup>1</sup>。母語からの負の転移は、学習者の音声や形態統語の習得を始めとし、談話や言語運用の習得に至るまで、第二言語習得のあらゆる領域に生じることが明らかになっている<sup>2</sup>。日本語母語話者の英語の産出

<sup>1</sup> Odlin(1988), Ellis, R. (2008)

<sup>2</sup> Lightbown & Spada(2006), Gass & Selinker(2008)

## 第3章

# 第二言語習得のメカニズム

第二言語を習得しているときに、私たちの頭の中ではいったい何が起きているのだろうか。本章では、まず、私たちが年齢を重ねるごとに身につけていく一般的な認知能力が、第二言語習得にどんな影響をもたらすのか考えていく。次に、第二言語習得での、入力された言語情報(言語インプット)の働きについて見ていきたい。さらに、第二言語習得における普遍文法(Universal Grammar; UG)の関与について、これまでに提案されてきた様々な考えを紹介していきたい。

### 母語獲得との相違点：一般認知能力

第2章では、第二言語を習得する学習者が、母語を獲得する幼児と大きく異なる点の1つとして、学習者には母語からの転移が生じていることを見た。母語を獲得する場合は、言語を1つも獲得していない状態からの出発であるが、第二言語習得の場合は言語を既に1つ獲得した状態からもう1つ別の言語を習得していくため、様々な形で母語の言語特性の影響を受けることを見てきた。

大きな相違点の2つ目として、第二言語学習者は一般認知能力がある程度高くなった状態から習得を開始することがあげられる。言語を習得する際に、一般認知能力が高い状態から始めるとどのような長所が考えられるだろうか。それは、おそらく認知能力が高い分、世の中の事象や習慣について常識的に考えながら、その知識を利用して言語を学習できる点ではないだろうか。第二言語でスピーキングやリーディングをする際にも、背景知識があると、次にどのような展開になるか、ある程度予想できる。

また、語彙の習得とも関連することだが、物事の内容を知っていることも

## 第4章

# 学習者要因

本章では、各学習者の持つ個人的な要因、つまり「学習者要因(learner factors)」について考察していきたい。学習者が第二言語を学習していく際に関わってくる様々な要因には、内的要因(internal factor)と外的要因(external factor)がある(表1参照)。内的要因には、動機づけ(motivation)、個性(personality)、知能(intelligence)、言語適性(language aptitude)、学習スタイル(learning style)、学習開始年齢(L2 starting age)などが含まれている<sup>1</sup>。

一方、外的要因とは、学習者がどのような条件の下で第二言語を学習するのかという、学習者を取り巻く学習環境(learning environment)のことである。第二言語環境か、外国語環境かといった問題が含まれる。また、もし教室で学習するならば、年間シラバスに沿って学習するのか、教科書を使用するのか、誰に習うのか(ネイティブ・スピーカーか非ネイティブ・スピーカーか)などの学習方法も含まれる。さらに、週に何時間学習するのかといった学習時間の問題なども要因として含まれてくる。これらの外的要因については、第Ⅱ部の他の章の話題と関連して触れることになるので、記述の重複を避けるために、本章では学習者の内的要因を中心に論考を加えていくことにしたい。

表1 学習者要因

|      |                      |
|------|----------------------|
| 内的要因 | 動機づけ・個性・適性・学習スタイル・年齢 |
| 外的要因 | 学習場所・学習方法・学習時間       |

<sup>1</sup> Ellis, R. (2008)

## 第5章

# 教室における第二言語習得研究

第二言語を学習する環境が大きく2つに分けられることは第1章で述べたとおりである。そのうちの1つが外国語環境での第二言語習得であるが、その典型的な学習環境は教室という場での第二言語習得である。この環境での習得は、たとえばアメリカで日本人の子どもが英語を習得していく第二言語環境とは条件がかなり異なる。それは、言語インプットとアウトプットの質と量、他者とのインタラクションの仕方、そして教師や教科書などを通しての明示的な指導の有無などの点において、大幅に異なるのである。

その相違を、誤りの訂正、言語の質、インプットの量、母語話者の関わり度、談話の型、話すプレッシャー、インプットの調整、の7項目で比較した表を次ページに載せておく<sup>1</sup>。この表1からわかるように、教室場面(外国語環境)での習得は人工的であり、第二言語を自然に習得しづらい環境であることがわかる。しかし一方で、世界の大勢の人たちが教室で第二言語を学習しているという事実がある。この事実を重く受け止めれば、第二言語学習者が教室場面でどのように言語を習得していくのかを明らかにし、その結果に基づく適切な指導方法を考案していくことは重要なことである。

すなわち、本章のタイトルでもある「教室における第二言語習得研究」とは、教室環境で第二言語を学ぶ学習者が、どのように第二言語を習得していくのか、実証的に研究する学問分野なのである。その際、インプットを提供する教師の役割が重要となってくる。ただし、教室ということに焦点を当てた習得研究ではあるが、第二言語習得のプロセス(過程)を記述し説明すると

<sup>1</sup> 小柳(2004: 96)を一部改編。